

令和6年度 学校評価表

品川区立山中小学校

校長

岩田 環

山中小学校校区教育協働委員会

委員長

針谷 玲子

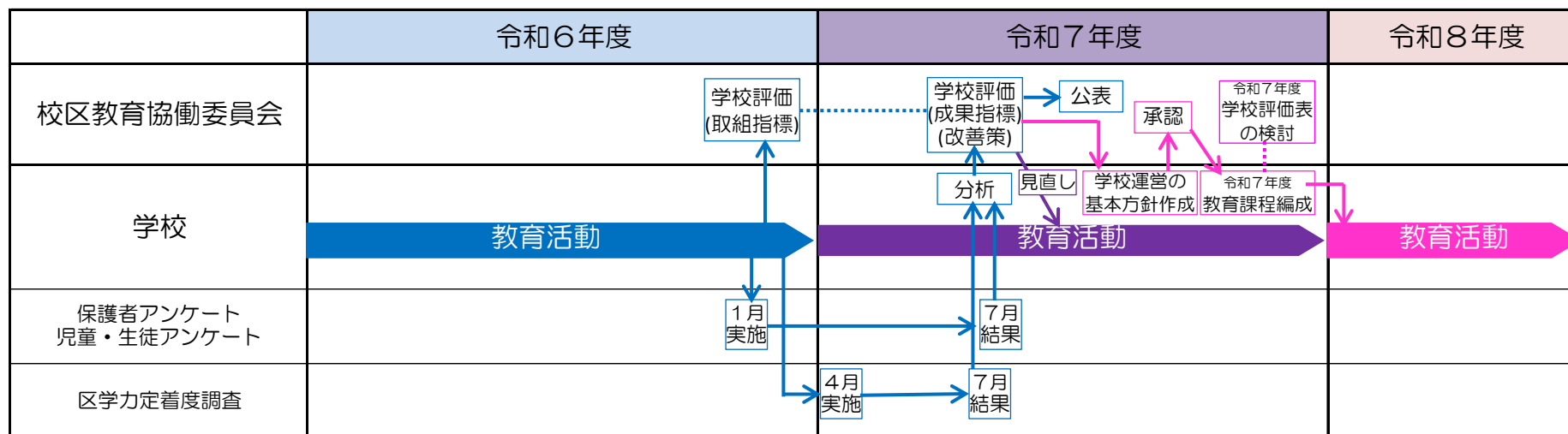
校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。

学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和6年度の学校評価が令和7年度および令和8年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和6年度 学校評価 品川区立山中小学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		○子どもたちの「生きる力」を支える確かな学力を身に付けさせる。本校が捉える確かな学力とは、 ①読み・書き・計算などの基礎的・基本的な知識及び技能 ②課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	各教科、単元テストの平均点で、低学年90点以上、中学年85点以上、高学年80点以上をめざす。	低学年は算数の思考・判断・表現、国語の漢字の習得と知識・技能に課題が見られる。中学年は単元によっては達成できていないものがある。高学年は算数の思考・判断・表現が、平均80点を下回っている、それ以外は80点を上回っている。	B	・今年度成果の見られた算数での習熟度に応じた問題に取り組ませる手立てを継続する。また、問題の解き方を説明し、考えを話し合う時間を授業の中に設定し、思考・判断・表現の力の伸長を図る。 ・漢字テストは問題数を減らして2回実施したり、25問・50問テストは実施予定を学校だよりなどで保護者にも事前周知し、家庭の協力も得ながら取り組み、定着させていく。
	各単元で、基本問題と発展問題に取り組ませる。その際、習熟に合わせた分量を各学年の実態に合わせる。	算数では、基礎・標準・発展の3段階に分けて問題を準備し、それぞれの習熟度に合わせた問題に取り組ませた。	A	
②	学力調査の結果(国・区)で平均を上回る。	品川区学力定着度調査において、国語・算数ともに3観点すべてで全国平均を上回った。全国学力調査でも国語・算数ともに全国及び東京都の平均正答率を上回った。	A	・品川区学力定着度調査及び全国学力学習状況調査の結果は目標を達成できている。実施結果を丁寧に分析し、引き続き目標を達成できるよう授業改善プランを作成し、個々の教員の授業改善に活かしていく。理科では、ワークシートやドリル、教科書問題等を活用することによって、理科の知識・技能の向上と定着を図る。 ・単元のワークテストの結果で、正答率が低かった領域や問題については、補充問題に取り組ませて、確実に身に付けられるようにしていく。
	R6の学力テストの分析結果と改善方法に着目して授業を行う。	学力向上委員会で分析・改善方法が話し合われ、各学年で授業改善プランを作成し、それに基づいた授業改善に取り組んだ。	B	
	各教科における児童の苦手な領域・単元の問題数を増やし、強化する。	児童の苦手な領域や単元について、問題数を増やすなどをして授業改善に概ね取り組めた。正答率の低い問題は補充問題に取り組ませるようにした。	B	
③	問題解決型授業に取り組む。	児童の「なぜ」「どうして」の問いを大切に、主体的に解決を図る授業デザインを行った。意図的・計画的に児童が高い関心・意欲をもって臨む授業を盛り込んだことで、課題発見・解決能力、学習計画を作成する力を育成することができた。	A	・たてわり学習を中心に取り組んだ問題解決型学習では、学習における自己決定の場面が多く、主体的に探究的な学びに向かう姿が見られた。今年度のノウハウを活かし、内容の進化を図るため、次年度は高学年でたてわり学習を継続する。 ・実体験から学ぶ機会、地域人材の協力・地域資源を活用した取組は全学年で展開していく。
	問題から課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現の探究的な学習のサイクルを意識した授業を展開する。	たてわり学習を中心に、探究的な学習のサイクルを基にした授業を展開した。シンキングツールで情報の分析・整理を行い、グループでの話し合いにより、問題解決を図った。	A	
	学習教材や学習方法を工夫する中で、異学年交流や体験学習、地域人材等を活用した授業を取り入れていく。	年間を通してのたてわり学習、各学年での出前授業、地域資源や地域人材を学習活動に多く組み込み、児童が多様な他者と触れ合い、体験的に学べる授業を行った。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○自己肯定感を高める指導を通して、互いに人権を尊重し、情操豊かな児童の育成に努める。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	山中スタンダードの各項目について、全校児童が取り組み、100%の達成率をめざす。	学期に一回、学級や学年集会で山中スタンダードの確認を行った。自身の行動の振り返りを行うことで、達成率の向上を目指した。約束が守れなかった児童への個別指導も行った。	B	・山中スタンダードの見直しは、今年度も児童・保護者・校教協で話し合い、各者の意見を反映させながら改訂していく。 ・山中スタンダードの児童の取り組み達成率は、90%以上として実現可能性を高めていく。学期1回以上教員用の内容も踏まえ、その時点で守ることができていることは何か、可視化し、児童に定着させていく。
	・全教職員で指導事項を共有し、指導する。 ・山中スタンダードを毎年見直し、児童や保護者と共に作成する。	・全教職員で指導事項の共有及び共通指導を確認し、指導に当たった。 ・山中コミュニティスクールDAYで、児童・保護者・校教協で話し合いを実施し、山中スタンダードを見直した。	A	
②	全ての児童が褒められたり、認められたりする経験がもてるよう、様々な活動や学校行事を工夫する。	学級指導や学年集会で、学習面や生活面の良い行動や成長を取り上げ、価値付けた。学校行事や委員会活動、クラブ活動、係活動、たてわり班等、児童が様々な役割を担い、活躍できる場を設定した。	A	・学校行事、当番活動、係活動、委員会活動、クラブ活動では、児童一人一人に役割をもたせ、目標の達成に向けて取り組ませる。また、責任をもって取り組んだことを価値付けていく。 ・たてわり班の運営など、高学年児童には下学年をまとめる機会を設け、自治的に活動を進める力を育むようにする。
	当番・係・委員会活動やたてわり活動で、自分の役割を果たす経験をもたせる。	学級内の当番活動や係り活動では、様々な仕事を体験できるようにした。高学年は一人一人が役割を担い、リーダーシップを発揮したり、責任をもって務めたりするように声をかけ、支援した。	A	
	学校行事や市民科一貫プランを推進する中で、キャリアパスポートを用い、児童が自分の成長を喜べるような指導を充実させる。	全校でキャリアパスポートを用いて学校行事の振り返りを行い、担任からめあてに対する取組や成長点について、肯定的なコメントを付けて返却し、事後の教育活動への意欲をもたせるようにした。	A	
③	音楽、美術、生け花、茶道、書道、読み聞かせ、観劇などの芸術や伝統文化に触れ、経験をさせることで児童の心情を育てる。	各体験活動前の事前学習では、学習の意義を明確にし、体験活動を通して礼儀を重んじる態度を身に付け、引き継がれてきた伝統文化のよさを感じられるようにした。	A	・各体験活動の事前指導では、ねらいを明確にし、様々な地域人材の力により活動が支えられていることを意識させるようにする。 ・学校行事を通して身に付けたい力を児童は自分の目標として設定させ、学年の目標とともに意識して取り組ませるようにする。振り返りの際、達成できたことを認め合い、集団で一つのことを創り上げる経験となるように指導していく。
	いきいき(高齢者クラブ)やCSと連携しながら、伝統文化を学ぶ経験をさせる。	CSコーディネーターが学校と地域人材とのパイプ役となり、様々な学習活動を計画した。いきいき(高齢者クラブ)の協力を得て、茶道や華道の体験活動を行った。	A	
	学芸会や演劇鑑賞教室、音楽鑑賞教室等を通して児童の情操を育てる。	学校行事を通して、学年全体で一つのものを創り上げていく経験を積めるようにした。プラスの言葉かけ、成長の認め合い、支え合いなどを大切にすることで、心の成長や達成感を味わうことにつなげた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○生涯にわたって運動に親しむ資質や能力、健康の保持増進のための実践力の育成を図りながら、体力向上につなげる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	体力テストの結果(個人)が昨年度よりも上回るように日常の指導を充実させる。	体育の授業で、体力テストにつながる動きを準備体操や主運動に取り入れた。また、スポーツトライアルの種目にも取り組んだ。	B	・体力テストの結果に基づく指導には、前年度の全国平均や東京都の平均と比べ、数値が下回った項目を重点的に準備運動や主運動に取り入れる。また、スポーツトライアルの種目でも取り組むようにする。
	授業以外にスポーツトライアルやワンミニッツエクササイズ等、数多く運動の機会を設ける。	品川スポーツトライアルに取り組む期間を設定し、帯時間を利用するなどして2～3種目に取り組むようにした。	B	
②	体力テストの結果(全体)を受けて、到達目標に達していない項目について、全体の底上げを図る。	本校の課題であるソフトボール投げの記録が向上するよう、ボールを投げる体験を増やし、投げ方の基本動作を身に付けられるよう、品川スポーツトライアルのシャトル投げを実施した。	A	・体力テストの結果により、本校の課題となった投力の向上に向けて、山中ゼミナールなどの教員研修で指導の仕方を学び、体育の授業で活かせるようにする。 ・外気温や湿度を考慮しながら運動に取り組む時期の調整を図っていく。 ・休み時間のエリア分け、時間分けなどの工夫により、児童の外遊びの場を保障していく。
	体育の授業の中で、縄跳びや持久走など、持久力が付く活動を取り入れながら学習を進める。	暑い時期を避け、動きを持続する能力を高めるための運動を実施した。短縄跳びを一定時間続ける運動を取り入れ、持久力の向上を図るようにした。	B	
	休み時間の外遊びを励行し、日常的に体力向上を図る。	休み時間は教員と一緒に外遊びをしたり、児童に外遊びを呼びかけたりして積極的に体を動かす機会を増やすようにした。	B	
③	体育の授業にICTを効果的に活用する。	学年の実態に応じて活用した。単元のはじめと終わりの動画を比較することで、技能の向上に気付けるようにした。	A	・ICTを各学年の実態に応じて活用し、自分の動きを動画で確認する機会を設け、運動技能の向上を図らせていく。 ・手本となる動画や写真を活用して、児童にねらいを明確に示してから、学習に取り組むようにさせる。
	児童に手本や評価規準を動画・写真等を使用し、体育の指導をする。	動画や写真を活用して、技のポイントを押さえたり、評価規準を提示したりすることで、何を意識して運動するのか、児童に明確に理解させるようにした。	B	
	iPadの録画機能等を活用し、運動技能の向上を図る。	iPadで自分の動きを動画撮影して見返すことで、どこに課題があるのかを児童自身が気付き、運動技能の向上を図るようにした。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○いじめは重大な人権侵害であり、決して許されることではないことを、すべての教育活動を通して、意図的・計画的に指導を行う。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	いじめは重大な人権侵害であり、「いじめは犯罪である」ということを児童に理解させる。	各学期1回いじめ予防授業「トリプルチェンジ」を実施し、いじめの定義やいじめをなくす行動を発達段階に応じて指導した。市民科授業地区公開講座でも全学級のいじめ予防授業を公開し、保護者にも考える機会を設定した。	A	・年3回のいじめ予防授業を行い、いじめとは何かを学ぶ場を設ける。 ・全校朝会や各学級で繰り返しいじめ未然防止に向けた講話を行い、いじめを生まない風土づくりに取り組む。
	全校朝会や朝の会、帰りの会などで、定期的にいじめに関する話題について教員が話をする。	全校朝会や各学級での指導で、繰り返しいじめの未然防止に向けた講話を行った。	A	
②	いじめの早期発見・早期対応・早期解決に向けて組織的に対応する。	月1回のいじめDアンケートでの聞き取りを丁寧に行い、毎週の生活指導夕会では迅速な情報共有と共通対応を確認した。いじめ対策委員会で組織的に情報の整理と対応を協議し、解決を図っている。	A	・デイケンで日々の児童の状況を把握し、月1回のいじめDアンケートの聞き取りを基に、必要に応じていじめ対策委員会を開き、対応について協議する。 ・児童や保護者からのいじめの訴えや相談は、速やかに管理職に報告し、翌日以降の児童の過ごさせ方や指導について確認し、回覧も活用しながら全教職員と情報共有し、組織的で、共通認識に基づく対応となるようにする。
	いじめ各種調査等で把握した情報を、管理職に報告・連絡・相談をし、いじめ対策委員会に対応する。	いじめ各種調査結果の活用、児童や保護者からの訴えは速やかに管理職に報告・相談し、毎月のいじめ対策委員会に加え、臨時でも会を開いて対応を協議し、全教職員への情報共有を行った。	A	
	保護者や児童からいじめの相談を受けた時は、事実確認を行い、被害者の気持ちに寄り添った対応を組織的に行う。	いじめの相談には迅速に対応してきている。いじめ以外の問題もすぐに事実確認を行い、問題の解決を組織的に図るようにしている。	A	
③	児童自らが、いじめをなくす取り組みを主体的に実行しようとする態度を養う。	いじめ防止プログラム「トリプルチェンジ」で学んだ、いじめを深刻化させないキーワード「シンキングエラー」と「アンバランスパワー」を意識して過ごすよう指導した。	B	・「人を思いやるとはどのようなことなのか」を朝や帰りの会、日々の指導の中で具体的場面を基に児童に理解させるようにする。市民科の授業でも道徳の教科書を活用し、人としてどのように考え、過ごすかについて考えさせるようにする。 ・いじめ防止推進デーでは共通目標を設定し、品川教育の日の山中小いじめ根絶宣言を読み上げて、いじめは決して許されないことを確認し、いじめに対する児童の意識を高める取り組みを継続する。
	いじめ防止推進デーでは、いじめ根絶バッジを身に着けさせ、思いやりの心を意識させたり振り返りをさせたりする。	いじめ防止推進デーでは、生活指導部が設定した全校共通の目標を提示し、意識して過ごすよう意識付けを行った。	A	
	品川教育の日は、代表委員会が中心になって、山中小いじめ根絶宣言を読み上げ、全校児童の人権感覚を磨く日とする。	学期に1回の品川教育の日には、全校児童が集まって山中小いじめ根絶宣言を読み上げ、どんな理由があってもいじめは許されないことを確認した。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目● (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		○「身の回りのできごとから自ら課題を発見し、解決方法を創造できる児童の育成」を目指して、教育活動を展開する。 ①たてわり遊びやたてわり学習(市民科)を推進しながら児童の主体性を育てる。 ②タブレット端末を用い、主体的・対話的な学びの授業を展開しながら表現力を育てる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	CSやPTAと連携を取りながらESD、SDGsに着目させた指導を行う。	CSと連携し、地域人材(町会長)を活用した防災学習を実施する。PTAと連携し、リユースフェスを実施する。	B	・CSと連携し、地域人材(町会長)や保護者に協力を仰ぎ、授業でのゲストティーチャーや支援を依頼していく。 ・外部講師を活用した市民科授業の中に、保護者にも参加を促す内容を取り入れることを検討していく。
	外部講師、保護者等参加型の市民科授業を各学年で実践する。	外部講師を活用した市民科授業を行っている。	B	
②	市民科小中一貫プランの時間を活用し、SDGsの課題をテーマに、全校たてわり学習を推進する。	たてわり班でのSDGsに関するテーマ設定と学習への取り組みを通して、上の学年が下の学年の学びをサポートしたり、協力し合ったりして、協働的に学びを進めるようにした。	A	・たてわり学習は内容について深く調べ、理解できるようにするため、5・6年児童が取り組むようにする。 ・山中ゼミナールでの教材研究は継続し、探究的に学びを広げさせる指導について協議を通して学ぶようにする。 ・地域人材や地域資源、保護者の協力を得て、たてわり学習の内容の充実を図る。
	教師が率先して教材研究をし、SDGsに関わるテーマを構築し、高学年児童のリーダーシップを育てる。	山中ゼミナールでSDGsにかかわるテーマについての教材研究を行い、6年児童との事前協議を重ねながらたてわり学習に取り組み、6年児童のリーダーシップを育成した。	A	
	緑化隊やおやこエコクラブ、CS・地域人材を活用し、たてわり学習を進める。	たてわり学習での出前授業や授業運営面に地域人材やCS、緑化隊、保護者等の協力を得て進めてきた。地域資源も活用し、地域へのかかわりを児童が意識できるようにした。	B	
③	タブレット端末を通して、主体的・対話的な学びを展開する。	教科の学習で、タブレットを活用して話し合う活動や発表などを行った。互いの意見を知り、さらに学びを進め、深めるためには効果的な活用方法を研究する必要がある。	B	・タブレットを活用した児童の話し合いや活動が学びを深めるものとなるように、山中ゼミナールで実践を紹介したり、互いの取り組みを振り返ったりして研究していく。 ・プログラミングの指導や発表の際のタブレット活用の好事例を山中ゼミナール等で紹介し、各教員が授業に活かせるようにする。
	OJT研修会を教員のICT実践例やICT研修内容を紹介する場にも活用する。	山中ゼミナールでは、ICTの活用方法の紹介やプログラミング学習の実践例の紹介を行った。	B	
	学年の発達に応じ、発表時に、タブレットを用いて説明したり、図や表を示しながら説明したりする授業を展開する。	学年の実態に応じて、発表する際にタブレットを活用し、ロイロノートで資料を作成して、プレゼンテーションを行う授業を行った。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成